

日本赤十字災害看護学の確立をめざして（第2報）

～日赤系短期大学生の赤十字に関する認識の実態～

山口貴美子¹⁾ 山本捷子²⁾ 村上照子³⁾

Toward Establishment of Disaster Nursing Theory in the Japanese Red Cross (the 2nd report)

Tomiko YAMAGUCHI Syoko YAMAMOTO Teruko MURAKAMI

要旨：赤十字災害看護学の構造と教育方法を確立するためには、赤十字に関する教育が基盤となる。そこで本学の学生が赤十字に関してどのように認識しているかを学生の卒業時に調査し、日赤系の3短大看護学科・介護福祉学科学生と比較検討した。

その結果、学生はマスコミ報道や学習環境の中で赤十字を意識し、赤十字のイメージは赤十字活動や「行動の7原則」の知識にもとづいており、赤十字の活動・事業については知っているが、組織や歴史の知識は少ない。3短大は同様の結果を示すが、カリキュラムや教育方法、学習環境やクラブ活動によって、得られる知識やイメージにわずかな差違が見られる。日本赤十字の看護教育においては、赤十字や災害看護学に関する教育カリキュラムはもとより、赤十字の理念「人道」を実践化するための体験的学習や学習環境整備が必要であろうと考察した。

キーワード：日本赤十字看護教育、災害看護学、赤十字

Summary : Education about Red Cross will be the basis for establishing the structure and education methodology of the Disaster Nursing Theory. We investigated how the students recognize Red Cross on their graduation, and compared the results to those of nursing and caring students in three Red Cross Junior Colleges.

Consequently, we found that the students were conscious of Red Cross in the media news and their learning environment, and that their image of Red Cross was based on Red Cross activities and the knowledge of the Seven Behavior Principles. Students of all three junior colleges show the same tendency, and slight difference in their knowledge and images depending on their curricula, education methodologies.

Key Words : Education of nursing in Japanese Red Cross

Disaster nursing theory

Recognizing Red Cross

はじめに

近年の18歳人口の減少や高等教育の多様化の中で、私立大学は「個性ある教育」を打ちだすことが求められている。本学の建学の精神は「赤十字の理念」すなわち「人道の実践化」であるが、その教育目標にそった教育実践・運営がなされることが私立短大としての本学の課題であろう。

筆者らは、日本赤十字社（以下「日赤」）系の教育機関における特色の一つとして、「赤十字災害看護学」の教育が重要と考え、その確立をめざして研究を進めていることを、本学紀要第3号で報告した¹⁾。その後、災害看護学の基盤として、赤十字に関する認識が先行学習や教育環境によって修得されることが、災害看護の学習の動機づけ

1) 日本赤十字秋田短期大学講師 2) 教授 3) 助教授

本研究は、平成10年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費補助金を受けたものである。

として重要であり、そのためにはカリキュラムや教育方法、あるいは教育環境について検討しなければならないと考えるにいたった。

本学のカリキュラムでは、赤十字関連科目は、看護学科の「赤十字概論」と介護福祉学科の「赤十字活動論」のみで、それ以外には何ら赤十字関連科目や特別教育計画はない。また、開学初年度の看護学科1期生の入学時の意識調査²⁾では、本学受験動機の最上位に「赤十字だから」「国際的に活動している赤十字」が挙げられていたが、それらの入学生に対し、3年間の教育はどのような効果をもたらしたであろうか。

そこで、1期生の卒業時に当たり、学生の赤十字に関する認識の実態を把握し、赤十字学園の他の短期大学および本学介護福祉学科学生の認識と比較考察し、今後の災害看護学と赤十字関連の教育計画のあり方を検討する資料としたい。

I. 調査目的

日赤系短期大学学生の赤十字に関する認識の実態から赤十字教育と災害看護学のあり方を探る。

II. 研究方法

1. 調査対象：日本赤十字学園の3短大（武蔵野、愛知、秋田）看護学科3年生214名、ならびに日赤秋田短大介護福祉学科2期生49名

2. 調査時期：平成11年3月

3. 調査方法：筆者等が作成したアンケート用紙を、赤十字災害看護研究会員である各短大の専任教員が卒業直前のクラス集合の機会に、趣旨を説明・配布し、その場で記入してもらい、直後に回収した。

配布数263、回収数238、回収率91%。

4. 調査内容

- 1) 生活の中で赤十字を意識する機会
- 2) 赤十字に対するイメージ
- 3) 赤十字に関する知識の有無
- 4) 赤十字関係の活動の有無

5. 集計・分析方法

1) 選択回答は、統計ソフト三四郎を用いて単純集計した。

2) 自由記載の内容については、筆者ら3人で共同検討し、意見の一致をみた後に分類、集計した。

6. 用語の操作的定義

認識：「理解している知識」や「思ったり感

じたり、意識している考えや思い」で、ことばで表現されること。

III. 調査結果・分析

1. 赤十字を意識する機会（表1）

「どのような機会に赤十字を意識するか」という質問に対する記述総数は344件であった。

最も多いのは、「マスコミ報道」で、158件46%であった。テレビや新聞で、災害時の救援状況や外国での救護に赤十字職員が派遣される場面、あるいは臓器移植や医療ミスなどで赤十字病院の名前が出た時に、赤十字を強く意識するというものである。調査時期に、日本初の脳死判定を伴う臓器移植が高知赤十字病院で行われたことや、前年にペルー公邸人質事件やコソボ紛争など、赤十字関連のニュースが多かったことも関係していると考えられる。

次いで、献血車を見たり、献血に関する事項が86件25%であった。学生奉仕団の活動で献血運動に関わっていることも関係しているであろう。

3番目に多いのは、「日赤短大生を想起させられる時」の27件8%で、「学校名を聞かれた時」や、「実習ユニフォームやナースキャップを着用する際」と述べている。その他には「赤十字マークを見たとき」「隣接する赤十字病院を見るとき」などで、具体的な赤十字のシンボルマークは認識を刺激している。

表1 赤十字を意識する機会 n=344

項目	件数(%)	内容
マスコミ報道	158(46)	救援活動（紛争時、難民救援） 震災、災害、病院、救急法、脳死 医療ミス、ボランティア、臓器移植
献血	86(25)	献血車、献血ルーム
日赤短大生	27(8)	学校名（教えるとき・聞かれたとき） 実習服、キャップを着用する時
赤十字のマーク	20(6)	赤十字のマークを見るとき
ボランティア	12(3)	ボランティア活動時
隣接する病院	10(3)	隣の病院を見るとき
授業	6(2)	災害看護、赤十字概論、救急法
募金活動	5(1)	募金活動時
教育	4(1)	入学式、防災訓練
病気になったとき	2(1)	病気の時（病院受診時）
その他	7(2)	マザーテレサ スイス
特に意識しない	7(2)	
合計	344	

2. 赤十字に対するイメージ (表2)

赤十字のイメージとしての自由記載の回答総数は350件であった。

最多は「赤十字の原則」にまとめられることばや概念で、141件40%であった。具体的には「博愛」「人道」「奉仕・ボランティア」「中立」「世界的」が多い。

2番目に多いのは130件37%の「赤十字の活動、組織としての赤十字社」に関するイメージである。それは具体的な活動・事業のことで「献血事業」「医療活動」「国際救援」「災害救助」「海外派遣」「医療奉仕団体」等が挙げられている。

次いで、創設者の「アンリ・デュナン、スイス」が15件であった。

さらに「看護婦」に関することばを挙げている者が14件4%、「日赤は看護婦、優しい看護婦、すばらしい、技術が優秀な看護」などである。他に「赤十字マーク・赤色白色」という赤十字のシンボルや色のイメージが7件あった。

一方、感情的なイメージとして「長い伝統」「やさしい」「大切な」「思いやり」という、どちらかといえば肯定的なプラスのイメージのことばで表現している者が20件、「硬い」「封建的」「厳しい」「こわい」という否定的なマイナスのイメージのことばを表現している者が20件であった。プラス、マイナスは同数であった。

表2 赤十字に対するイメージ n=350

項目	件数(%)	内容
赤十字の原則	141(40)	博愛、人道、中立、独立、平等 平和、奉仕(ボランティア)、公平、世界的
赤十字の活動 活動組織	130(37)	救済機関、国際救援、災害救助、海外派遣 世界的・国際的に活動、医療、病院、JRC 看護婦養成、献血事業、骨髄バンク 発展途上国の開発、救命救急講習会
アンリ・デュナン スイス	15(4)	アンリ・デュナン スイス
看護婦	14(4)	優しい看護婦、技術の優秀な看護婦 看護の中心的役割、看護医療の発端 素晴らしい看護
赤十字マーク 赤色、白色	7(2)	赤い十字架、赤十字マーク 赤い、白い
肯定的 プラスイメージ	20(6)	長い伝統、素晴らしい、大切なもの 誰にでも優しい、人を思いやる
否定的 マイナスイメージ	20(6)	硬い、堅苦しい、封建的、厳しい、怖い 古い
その他	3(1)	特になし
合計	350	

赤十字のイメージに関しては、1987年に報道機関で働く現役記者を対象にした調査³⁾があるが、その報道関係者のイメージは「赤十字は人道的で奉仕的、活動的だが、同時に官僚的で古くさい」という認識が多かった。社会人あるいは成人の記者らは、赤十字の性質・特質の面を挙げているのに対し、現代の看護・介護系の学生は、直接的な赤十字の組織的な活動・事業そのものや、赤十字概論などで学習した「赤十字の理念」を想起している。また「優しい看護婦、技術が優秀な看護婦」という看護婦をイメージするということは、学生自身の職業的アイデンティティとして目指す目標であり、臨床実習や赤十字病院に隣接する学習環境によって、より現実的なイメージを抱かせるためであろう。

感情的なイメージは、日常的な物理的学習環境のもたらす雰囲気や接触する教職員との対応から醸し出されるのであろうか。あるいは、入学式・卒業式などの行事の際の雰囲気や祝辞から思い浮かべるのではないだろうか。

3. 学生が知っている赤十字の活動 (図1)

赤十字の実践的な活動・事業について22の事項を並べ、知っているもの全てを選んでもらい、各事項について全回答者238人のうち選択した者の割合を集計した。

3短大の合計で平均して9割以上の者が知っている事項は、①血液事業、②国際救援、③災害救護であった。8割以上の者が知っている事項は、④看護婦養成、⑤難民救援、⑥病院経営であった。その他の多い事項は、⑦救急法の普及、⑧青少年赤十字、⑨発展途上国の開発協力、⑩骨髄データバンクであった。

しかし一方、語学奉仕団、アマチュア無線奉仕団、飛行奉仕団、点訳奉仕、安否調査、老健センターなどの赤十字の事業は目立たないためか、1割以下で、ほとんど知られていないと言える。

特記すべきは、各短大によって差があることである。たとえば、武蔵野短大生の6割以上が訪問看護ステーションや発展途上国の開発協力を知っている。骨髄バンクを知っているのは、愛知短大生と武蔵野短大生の6割前後に対し、秋田短大の看護・介護学生は5割前後とやや少ない。

また秋田短大介護学科生は、他の短大学生が9割以上が知っている3項目でもすべて8割程度で、最高の「血液事業」でも89%で、全体的に知って

いる割合が低いことが特徴的であると言えよう。

これらの差違の理由は、各短大・学科における授業内容の違い、実習場所の違い、実際に活動している血液センターや訪問看護ステーションなどの施設が近くに存在すること、ボランティア活動への参加体験、あるいは国際救護体験者や発展途上国をフィールドとして活動している教員が身近にいて、情報を得やすいことなどがあるためと考えられる。

4. 赤十字に関する知識の理解度 (表3)

赤十字を学ぶ者が一度は聞いたか見たことのある赤十字特有の専門的な名称や事柄について、記憶の有無を調べてみた。調査した事柄は「五人委員会」「単一」「ICRC」「佐野常民」「赤新月社」の5項目で、知っている内容を記述してもらった。何かが記述された件数は、延べ239件であるが、記入した人数は全回答者の2割以下で、ほとんどが白紙状態であった。

表3 赤十字に関連する知識の理解度 (記入者数)

	秋田(看護)	秋田(介護)	武蔵野	愛知	合計	正答数(%)
五人委員会	5	6	15	6	32	19(59)
単一	12	5	5	11	33	17(52)
ICRC	3	1	13	7	24	18(75)
佐野常民	23	16	27	12	78	67(86)
赤新月社	17	8	30	17	72	52(72)

記入の多かった事柄では「佐野常民」は78件の記入があり、「日本赤十字社の創設者」という正答率86%、「赤新月社」が72件、正答率72%、「五人委員会」「単一」「ICRC」は正答が少なく、

「聞いたことがある」または曖昧な内容の記述が多かった。

知っている者のみ記入しているので、正答率は高くなることは当然であろうが、1年次の学習は忘却されて赤十字の組織や歴史に関する知識はあまり定着していないと言えるだろう。

5. 赤十字関係の活動 (表4)

中学・高校時代に「JRC (青少年赤十字)」や、短大生になってからの「赤十字学生奉仕団」活動の有無を調べた。

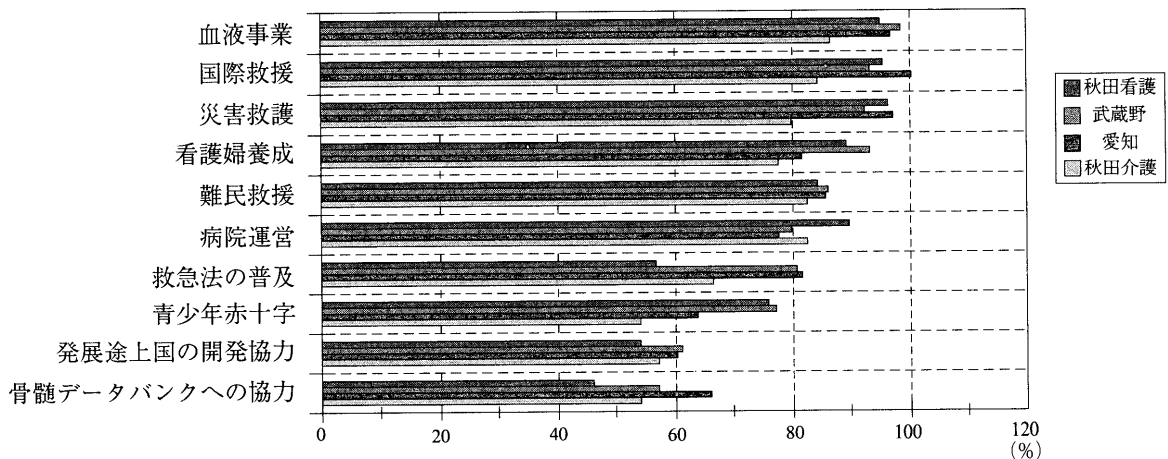
JRC経験者は69名29%、学生奉仕団は64名27%であった。赤十字学生奉仕団の参加は、秋田短大看護学科学生が49%、介護福祉学科学生が39%と高率だが、武蔵野短大生は6名、愛知短大生は皆無である。

表4 赤十字関係の活動 n=238

	秋田(看護) n=80	秋田(介護) n=49	武蔵野 n=84	愛知 n=50	計 n=238
JRC経験者	31 (39%)	23 (47%)	10 (12%)	5 (10%)	69名 (29%)
日赤学生奉仕団	39 (49%)	19 (39%)	6 (7%)	0 (0%)	64名 (27%)

いづれも秋田短大の看護・介護福祉学科学生のJRCや赤十字学生奉仕団の経験率が高い。この理由としては、秋田県はかなり以前からJRCの活動が盛んであり、県内からの入学生が多いことも挙げられる。なお、中学・高校時代にJRCに加入している者は学生奉仕団の参加率も高い傾向であった。

図1 学生が知っている赤十字の活動



IV. 考察

1. 調査結果のまとめ

日赤系の3短大学生の赤十字に関する認識を調査した結果、赤十字を意識する機会はマスコミ報道や日常の学習環境の中で、赤十字につらなる者としての意識をもつということが把握できた。

また、赤十字のイメージは、赤十字概論などで学習した知識にもとづいた赤十字の活動や組織という、即物的な認識が多い。しかし「赤十字」の理念、活動・歴史の中から心情的に会得した「価値観」や感情的な認識は少ないように思われる。

赤十字の知識としては、活動については知っているが、歴史や組織に関する知識は少ない。

このような認識の実態は、3短大看護学生では、ほぼ同様の傾向を示している。しかし、学校・学科によって、赤十字活動の知識について若干の相違点がみられる。

2. カリキュラムに関して

調査の結果から、赤十字災害看護学の確立へ向けて考慮すべき点は、まず第一にカリキュラムにおいて赤十字関連科目とその内容が検討され、それをどのような方法で教育をしていくかということである。

3短大のカリキュラムの中の赤十字関連科目をみる⁴⁾と、日赤武蔵野短大では、基礎分野に赤十字概論（1単位）の他に、オーラルイングリッシュ・国際関係論・異文化コミュニケーション各1単位を設定している。さらに専門分野に、災害救護論2単位60時間を設定し、その中に国際協力論、赤十字災害看護論、救急法を含めている。

日赤愛知短大では、赤十字原論（1単位・必修）赤十字救護方法論（1単位・必修）の他に、赤十字関連科目として法学、文化人類学、スペイン語、英語、国際保健学を設けている。

かえりみるに本学看護学科の赤十字概論、介護福祉学科の赤十字活動論いずれも1単位・15時間と少ない。

介護福祉学科では、救命救急活動論(15h, 1単位)を設定している一方、看護学科では救急法と蘇生法は成人看護学の一部として取り入れている。

赤十字系の卒業生として、どの学科でも学生時代に赤十字救護員の資格がとれる程度の時間数と方法を考慮すべきではないだろうか。

平成11年度入学生の看護学科4期生には、偶然に専門基礎科目特論Ⅱとして「災害看護論」（1

単位・15時間・選択、1年次）を設定したが、時間数・時期とも検討の余地があろう。

災害看護学は、専門科目として位置づけ、演習等を含めた授業とすること、ならびに救急法（蘇生法を含めて）は、特に次回のカリキュラム改正時には配慮されることを提言したい。

3. 教育方法に関して

赤十字の理念は「人道」であるが、「人道」とは単にお題目のように唱えるものではない。赤十字の理念は、観念的な理解だけでなく、行動化すべきものとして教育されなければならない。

「赤十字の行動7原則」は、人間が社会の中で人間的に生きて働くときの、すなわち「人道の実践化」の道標である。これは“知識注入”だけで身につくものではない。言い換えれば、赤十字概論の講義における知識の上に、自ら動き体験する中で、感性と共に技能として修得すべきものである。

経験学習としての救護看護の演習・災害救護訓練の参加、あるいは災害でなくても救護の必要な場面（糖尿病児や喘息の子どものキャンプなど）にボランティアで体験するなど、正課の授業だけでなく特別教育計画やクラブ活動の推進が重要である。

また特別教育計画では、実際に救護活動をした体験者に講演をしてもらい、具体的な体験談、スライドやビデオを用いたリアルな情報を提供すればより効果的であろう。

学習心理学的見地から、知識は時間が経過すれば忘却するのは当然であるため、各年次で体験学習を含めたプログラムによる継続的学習が必要である。

3. 「人道」に関する感性の教育について

赤十字は戦争と共に創設され発展してきたことは歴史的事実であり、赤十字を学ぶ際に、戦争を否定したり分離することはできない。赤十字を学ぶということは同時に「戦争」も含めて「人道、人命、人間の尊厳」を深く考察することであり、その中に「人間としての感性」を陶冶することが肝要である。

「人道の理念」は、「赤十字だからと言わなくても、看護や介護に共通する基本原理だから・・・あえて強調することはない」という意見を聞くことがあるが、筆者等は赤十字の教育機関だからこ

そ、「人道」を中心においた感性の教育に力点を置かなければならないと考えている。私立である本学の特色を出す教育としても「赤十字の原理」を意識し、その必要性を共通理解してなければならないのではないだろうか。

「人道、生命、人間の尊厳」についての学習は、「生命倫理」「社会福祉」などの科目においてだけでなく、全ての看護学の授業の中で学ぶことができる。また臨床実習一病者を対象にする病院実習だけでなく、老人や障害者を対象とする介護福祉学科の施設実習の際などにも、学習する機会は多い。

また、感性の教育は、正課の授業だけでなく、特別教育計画としての「特別講演会」や、前項で述べたような体験学習はより効果が大い方法である。それらの教育方法は、特に五感を刺激し、感動をもたらすからである。

さらに、感性の教育で重要なことは、無意図的な教育を考慮することである。なかんずく日常生活環境の雰囲気や、人と人のふれあう人間関係の中から得られる「より質の高い感動」を与えることが重要だからである。

既に出来上がった建築物の構造や色彩は簡単に手を加えることはできないが、その中の装飾や展示する芸術作品は、受け手（学生）の感性を刺激する。無機質な雰囲気は気持を不安定にさせるが、優しい落ち着いた絵や花、植物、装飾物などは心理的に和らげるものとして配慮すべきであろう。

無意図的な教育の中で最も難しいことは、人間関係である。しかも、赤十字の「人道」を実現化するために求められることは、人と人のふれあいの中で、個人個人を尊重し、公平に（差別しないで）関わることである。これらは、「人間愛」を基盤として、人間愛を至高のものとして努力していく人間の目標でもある。

学生を「赤十字の人材」として育成しようとするときには、教職員一人一人が、自ら「赤十字人」として、たゆまず努力し続けなければならないということでもある。

おわりに

本年10月に本学看護学科2年生には、日赤災害救護訓練に参加する機会があった。その成果は別の論文で述べているが、大変貴重な体験となった。「伝統的」を「古くさい、硬いイメージ」としてではなく、よき伝統を土台として、新しい時代の

変化に対応できる人材を育成する看護・介護の基礎教育をめざして、さらに検討を重ねていきたい。

また、調査に協力された卒業生に感謝するとともに、自ら求めて進んでいったそれぞれの場で、赤十字で学んだ人として活躍されていることを期待したい。

引用文献

- 1) 山本捷子, 村上照子, 山口貴美子, 金井悦子, 小原真理子, 尾山とし子, 今井家子: 日本赤十字災害看護学の確立をめざして(第1報) - 赤十字災害看護研究会の発足とその課題 -, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第3号, pp.29~33, 1998.
- 2) 酒井志保, 滝内隆子, 佐々木真紀子, 大島弓子: 看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態 - 本学看護学生1期生の入学時調査から -, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第1号, p85, 1996.
- 3) 日本赤十字社: 赤十字の動き, 第160号, pp.3~7, 1987.
- 4) 金井悦子, 山本捷子: 21世紀の日本赤十字看護教育への提言 - 災害看護学の確立へ向けて -, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 第10号, p.31, 1997.

参考文献

- 1) 森美智子, 白井陽子, 滝内澄子, 中野順子, 山崎トヨ, 大谷浅子, 村上寿恵子, 石田文江, 高山淑子, 福田けい子: 赤十字看護婦の特性と特性形成要因 - 赤十字看護教育施設3年生の認識分析より -, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 第8号, 1995.
- 2) 日赤のてびき刊行委員会編: 人道 - 日赤のてびき - 普及版, 蒼生書房, 1986.
- 3) 東洋, 柏木恵子: 教育の心理学, 有斐閣, 1992.